
IS The plunderer has a dream

north

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS The plunderer has a dream

【コード】

N3215T

【作者名】

north

【あらすじ】

死んでしまった『俺』は『私』こと織斑 一夏となり
小説の世界だと思っていたこの世界で生きていくことと成りました
と云

そんな自分のことを『略奪者 plunderer』と皮肉る私が
主人公に代わり生きていく、そんなお話です。

Re loading (前書き)

この小説はフィクションです

実在する団体、個人とは全く関係ありません

なお、この作品は『弓弦イズル』様著

『IS インフィニット・ストラトス』の二次小説となっております

私、作者northの独自解釈及びこうなったら面白そうだな、と言う妄想が含まれている物と成っております。

内容としては、主人公『織斑 一夏』の成り変わりのため

主人公以外認めない方や、他のキャラクターのイメージと合わない、二次小説は不快に感じる

等の事を思う方は此処で読むのをやめてください。

この小説は私個人の自己中心的な満足を満たすために書いたものなので悪意のある意見を言われますと作者は泣き崩れます

長々と書きましたがこの後続く本編を読んだ方が楽しんで頂けると幸いです。

『 I S T h e p l u n d e r e r h a s a d r e a m 』

始まります

Re loading

何処までも続く『空』

遠く遠く、何処までも遠い

遙か遠く何者にも触れられない

幼心に願ったのは『空』に触れたいと言つこと

決して届かない

見えているのに

手を伸ばしても

触れることは出来ない虚しいだけ

そんな近いようで気が遠くなるくらい遠いそんな物だったのを覚えて
いる

と言っても暫くして『空』の先に『宇宙』があるってことを知り、
目を輝かせるような現金な奴だったが

でも

少し成長してあんなに好きだった『空』を余り見上げなくなっていて

気が付けば俺は、地面にしつかりと足を着けていた

そして久しぶりに見上げた『空』は幼心に覚えていた

恋い焦がれた物よりも遠く

そう、悲しくなるくらい遠く感じた

背だって伸びたのに

昔より近くなつた筈なのに

手を伸ばしても

涙を溢しても

大切な『空』は遠く離れた場所になってしまっていた。

それでも手を伸ばす

最後だったから

どうしようも無いくらい遠くても、手を伸ばさずには要られなかった

このまま終わりたくなんてなかった

だから手を伸ばした

小さな頃に見たあの宝物に

其処で俺の物語は終わり

それから先に何が有るのかなんて解らなかつたし

知る術も持たない俺は

このまま消えてなくなるのだろうと思った

しかし

神様は気紛れで、意外と悪戯好きなのかもしれない

何故なら

俺は………

『一夏………』

と知らない名前を呼ばれて目が覚めた

そして新しく目覚めてから初めて見たのは綺麗な、

でも寂しそうに光っているブラックオニキスで

それを何とかしたいと想いながら……

なんの因果か判らないが『俺』は終わり『私』の物語が始まった。

これはお伽噺なのかもしれない

ハッピーエンドになるかバッドエンドで終わるか分からないし

誰にもワカラナイ

ただもう二度と悲しみで濡れたブラックオニキスが見たくない、

そんな

自分の事を『私』と呼ぶようになった

『私こと

略奪者 plunderer

織斑 一夏』の物語なのだから

I shoot the first

視線に物理的破壊力があつたら今頃穴だらけだろうな、

と余り意味の無いことを思いながら私はベッドフォンから流れる軽快なリズムに

合わせて指を動かしながら薄目を開けて周囲を観察する

私を観察するように見る目が大量に

それと殺気さえ込められた視線が一つ

そして私の前には新品に見える大きなデスクに巨大なスクリーン

これが学校の教室の一室だと言っただから驚きだ

そう、『俺』だった頃にはSFの世界か？と笑い話にしていたような光景

まあ、私が新しく目覚めた世界はISなんてトンでも兵器が存在するのだから、こんな光景も不思議ではないだろう

だって信じられるか？人がパワードスーツを着ただけで理論上とは
言え単身で宇
宙に行けるんだぜ？

スーツだぞ？

リクルートスーツを着て世界中を仕事で飛び回る際に使われる存在
もスーツだ

リクルートがパワードに変わっただけで、『俺』が恋い焦がれ憧れ
た空に行けるといふのだからもはや笑うしかないだろう、

とは言っても恋い焦がれ憧れたのは『俺』であって私ではなく

『俺』だった頃なら間違い無くパワードスーツを着たがっただろう
が、
今の私はリクルートスーツを着たがっっていると言つ変化があるにも
関わらず、

何故か

そう何故かわからないが女性にしか使えないと言つパワードスーツの

インフィニット・ストラトス

通称IS

を私は人類史上初めて男性で動かしてしまっただから人生は何が有るか解ったもんじゃない

まあ、蘇りなんて事を経験した私である以上不思議ではない

と、自分自身を強引に納得させなければやってられないこの状況

大体席も悪いのだ、真ん中の最前列、これが窓際だったらまだ救いがあると思うのだが

出席番号で席が決められている以上私にはどうしようもないだろう

今後の席替えに期待するしかあるまい

もはや薄れれば消えたと言っても過言ではない『俺』だった頃に本物の主人公がキツイとぼやいていたのをなんとなくではあるものの記憶しており、

その時、『俺』は羨ましいなと愚かにも思ってしまったが今なら言える、これはキツイと

少し話が変わるが私と言う人間は現在かなり危ない状態である
過去に本物の主人公が死んだことから命の危険はあると思っていた
がISを動かしてしまったが為に最近では違う意味の危険が大量に
発生してしまった

それは誘拐の危機に始まり、ハニートラップ、本当に最悪の場合は
私の体細胞からクローンを無許可で製作等等

幸いと言っているのか少し疑問だが私はある意味でISに関しては
一般人とは異なった為
今現在私が通うこととなったこのIS 学園で三年間の安全が一先
ずは保障されている

まあ姉によってと言う情けない状態だが

そして、このIS学園で学ぶことの出来る三年の間に生きる術と身
を守る技能を身に付けなければモルモット一直線の非常に泣きたく
なる現状にある訳で……

様々な不思議体験をした、死んで目を覚ましたら別人になっていた

とか

その人物は二時間前に心肺停止の上医師の診断によって正式に死んだとされていた

とか

元の名前が分からない癖に知識が断片的かつ偏って残っている

とか

色々あって家族になってくれた姉が実は世界最強でした等々、

様々な事を経験した

今までの人生で私が一つ学び声高に言えるのは、神様なんて悪戯好きで連中は嫌いだ
と言うことだろうか？

まあこうやって現実逃避をし続けるのは意味がないので前向きに行く
くとしてようじゃないか

私は織斑 一夏

女性にしか使えないと言うパスワードスーツ

インフィニットストラトスについて学ぶ

此処IS学園でたった一人の男

過去に例の無い特異点にして異端児

強いて言うなれば、羊の皮を被った狼の群の中に放り込まれた犬だ
だろうか？

姉譲りの目付きの鋭さを考えれば私自身狼の様だが

と思考を巡らせるのが一段落着くとほぼ同時に、聴いていた一曲が
終わった

すると教室のドアを開けて一人の少女が入って来た

背丈は低く、まるで私と同年代かそれ以下のように見える幼い容姿

少しサイズの大きいスーツにずれた黒縁の眼鏡

小さな子供が無理して大人びた服装をしている

と言っのが私の第一印象だった

「皆さん揃ってますねー？、それじゃあSHRを始めますよー？」

音楽プレイヤーが次の曲を再生するまでのタイムラグに信じられない
言葉が聞こえて来たので思わず半眼だった眼を見開きながらイヤ
ホンを外し件の大人びた服装をしている子供をまじまじと見てしま
った

「ひっひうう・・・え、えっと私は山田 真耶（ヤマダマヤ）
って言いますうこのクラスの副担任ですよ・・・」

どうやら半眼だった私がいきなり眼を見開いて睨み付ける様にして
見てしまったので怯えさせてしまったらしい

数少ない私の友人達にも注意されていたのに全く忘れていた

いや、目付きの鋭さを失念するほど私もこの周り全てが女性と言う
環境に緊張しているのかもしれない

と言うよりか緊張している

今だって何てこと無いような表情を浮かべている様に周りから見え
ているだろうが背中では冷や汗でびっしょりだし
なによりも、こうやって無駄に思考を廻らせている時点で私の混乱
はかなりのものでは無いだろうか？

少し落ち着こう、これから三年間私はこの環境で頑張らなければな
らないのだから、今すぐには言わないまでも少しでいいから慣れ
ていかなばなるまい

てか慣れる、私

「そ、それでは皆さん、これから一年よろしくお願いしますね？」

と山田先生が言ったが、残念なことに今現在この教室は変な緊張感に包まれており誰一人として返事をしなかった理由は分かっている

私が原因でこんな教室の雰囲気になってしまっているのだろう

山田先生に申し訳なく感じたが、この環境で一人元気に『宜しくお願ひします』等は口に出れなかった

ごめんなさい、山田先生、私は意気地無しです

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いしますね？えつと出席番号順に」

そう言つて目元を光らせていた山田先生が嫌に印象的だった

本当になんでこんな目に私は合っているのだろう

そう、幾度と無く繰り返した自問自答をしながらクラスメイト（全部女子）の話に耳を傾けながら

あの日を思い出す

人と言うのは生涯に、その人の人生を決める大事な運命としか呼べない存在に出会うと言う

まあ、私にとってそれがISと言うスーツだったのかもしれない・・・納得は出来ないが

二月の真ん中、私は体験としては二度目となる高校受験を受けるために家から試験会場まで電車で四駅という地味に遠い距離を移動していた

「寒いですね」

と愚痴を溢してしまうほどこの日は寒く、受験以外にも心配事のある私は思わず眉間に皺を寄せてしまう
すると必然的に眼も不機嫌そうに細まってしまっわけ

「・・・・・・・・」

無言で目を逸らし足早に立ち去る、運悪く私の眼を直で見ってしまった中学生が一人・・・・・・・・

何ともいえない悲しみを胸に抱き、新しい高校生活で友人は出来るのだろうか？と言う一抹の不安を感じながら道を歩く

私は多少ではあるが私が乗り移ってしまった『織斑 一夏』について知識を持っていた

- 1、 小説の主人公である
- 2、 鈍感でモゲロとよく言われる
- 3、 道に迷ってISを起動させてしまった

とこんな微妙な知識だが、何故こんな微妙な知識かと言うと俺だった頃の友人が大まかなあらずじを教えてくれ、面白いから読んでみると言われたものの忙しくて結局読まずにいたと言う微妙な結末だからなのだが

私は原作の主人公とは違うものの肉体は全く同じである、その為もしかしたら原作の主人公のようにISが動かせてしまうかもしれないと私は注意深く、
そう注意深く『私立藍越学園受験会場』と記載されている案内板に従って受験会場へと歩いていった

そして、そのまますんなりと筆記試験を受け

「あれ？このまま私は普通に生活できるんじゃないのか？」

と取らぬ狸の皮算用をしながら次の面接会場へと徒歩で移動している際に突然、目の前に四角い無骨なコンテナが降ってきたのだ

そう、本当に行き成りだった

何の前触れも無く、一切の慈悲も無く
それは私から希望を奪っていった

振ってきたコンテナからコードが飛び出したと思っただら私の体に巻
きつき

叫ぶ暇もなく私はコンテナに飲み込まれた

周りから上がるのは悲鳴

それはそうだろう、行き成り空から降ってきたと思われるコンテナ
からコードが大量に飛び出したと思ったら
人間を一人包み込むかのように捕食しコンテナの中に抱え込んでし
まったのだから

しかも、コンテナの中からはとてつもない音がしていたそうだから
相当怖かったと思う

実際、運悪く回りに居た男女合わせて5名の中学生は心に深い傷を
追ったとかどうとか、まあそんな事はどうでも良いか、

そして、ポーンと言う電子的な音が私の希望を粉碎し

私の運命を変える劇的な日となった事を告げた

「……くん……織斑君！……織斑一夏君！」

「え？はい！」

考え事に没頭した状態から一気に現実へと戻されたせいか思ったより大きめの声を出してしまった、不味いと思ったが案の定、山田先生は半泣きとなってこちらを見ている

「うえ……ご、ごめんね？大きな声出しちゃって、怒ってるかな？怒ってるよね？ごめんね？で、でも今ね？自己紹介のね？順番が『あ』から始まって織斑君の『お』なんだ、だ、だからね、自己紹介してくれないかな？駄目かな？」

山田先生はぺこぺここと半泣きになりながら私に頭を下げていた

とてつもない罪悪感……

「いいえ、私も考え事に夢中に成りすぎた様で、すみませんでした山田先生……えっと自己紹介でしたね？」

そう言って、席から立つ

ゆっくりと、堂々と胸を張り振り返る

そのまま逃げたくなった

だって今まで背中を受けていた視線を正面から食らうのだから、逃げたくも成ると思う

しかし、ここで失敗をすれば恐らく今後、灰色の高校生活を送ることと成る事は確定しているので無理やり自分を落ち着かせて声を出す

「織斑一夏です、見ての通り男なので皆様にご迷惑をお掛けすることがあるでしょうが仲良くしていただければ幸いです」

そして礼節的に一礼

私的にもうまくいったと思う、顔は引きつっていたら声が声は裏返っていないし
言っていることだって無難だ

うん、我ながら良くやった

とは終われなかった

向けられる視線は『もつとなんか喋ってよ』と言わんばかり
そして、困ったことに『それで終わりじゃないよね?』と言わんばかりの空気が出来てしまっていた

不味い、もう嫌だ、帰りたい

と、そこまで考えたところで私は強制的に思考を中断せざるおえない状況に合わされた

と言っか合った

Bannon!と言っ音で

「い!ったいですよ!姉さん!」

反射的につい言ってしまったから、失敗したとわかったがもう遅いズガン!と言っ、なんかもう音が可笑しくなっって私の脳天に出席簿が振り下ろされた

「織斑先生だ、あと何時までも突っ立てないでさっさと席に着け」

「はい……」

もうすでに机に突っ伏しているがそこはスルーする、我が姉

黒いスーツにタイトスカート、すらりとした脚にモデルも真つ青なプロポーション

そして、私とも共通する狼を彷彿とさせる釣りあがった眼

身内びいき無しにいつても美人な姉『織斑おりむら 千冬ちふゆ』が居た

いや、まあIS学園で先生をやっていると聞かされてはいたし世界大会の『モンド・グロッソ』で初代世界最強に成ったと言っていたからIS関係の仕事についているのも納得は出来るんだが、一応、家族として暮らしている以上、色々と解ってしまうわけで、何とというか姉さんが先生をやっているのに凄まじく違和感を感じてしまう

普段が普段だし

「あ、織斑先生、会議はもう終わっただんですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けて悪かったな」

「い、いえ、私、副担任ですから、これくらいいしないと・・・」

さっきまで泣きそうになっていたのは演技だったのかと疑いたくなるような早業で泣き止む山田先生

しかも、声には熱がこもり、視線もなんか危ない感じだ

そして、教卓に立つ担任、てか我が姉

「さて、諸君、私がこのクラスの担任の織斑 千冬だ（おりむらちふゆ）

君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことは良く聴き、理解しろ。逆らってもいいが私の言うことは絶対だ、いいな？」

何という暴力発言、良いんですか？そんな過激な発言しちゃって・・・
似合ってますけど、似合っていますけども！

しかしながら、私の困惑をさらに加速させる事態が発生

なぜなら、教室が黄色い歓声で包まれたからだ

「キヤーーーーー本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れて此処に着たんです！」

「お姉さまの為なら死ねます！」

うん、最後の人、そんな気軽に死ぬとかいわないでおこうね？

キヤイキヤイと騒ぐ女子達を姉さんはうっとおしそうに見て、一言

「毎年、毎年よくもまあこれだけ馬鹿者が集まるな、感心する。それともなにか？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

と、ポーズではなく本気で鬱陶しそうにしている辺りが姉さんっぽいなと思いつつ、

もう少し愛想良くしたらどうですか？と思った私が甘かった

「きゃああああ！お姉さま！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして！」

最近の女の子は元気で良いですね？姉さん

と微妙にズレタ事を考えているとチャイムが鳴った

「さあ、SHRは終わりだ、自己紹介の続きがしたかったら休み時間にもしておけ。

諸君にはこれからISについての基礎知識を半月で覚えてもらう。

その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。

良いか？良いなら返事をしろ、良くなくても私の言葉には返事をしろ、良いな」

何と言う、暴論、と言うかそんなんで良いんですか先生

良いんですか……そうですね、わかりました

そんで、諦めました。

教室の窓から見える空は腹が立つほど青く澄み渡っていた。

私、これからうまくやって行けるのかな？

I s h o o t t h e f i r s t (後書き)

とまあ、やっちゃった感がありますし、賛否両論あると思いますが
書いちゃいました・・・ISの二次小説

だって、IS面白いんだもん、オリジナルの方、詰まっただもん
とまあ野郎がこんなこといっても気持ち悪いんでもうグダグダ言
いません。

改めまして、作者のNorthです。

I S T h e p l u n d e r e r h a s a d r e a m

このお話を読んで頂き後書きまで眼を通してくださりありがとうございます。
ざいます。

まあ、この小説を読んだ方が面白かったと感じていただけれるよう
な物になるよう頑張って書いていきます。

以上Northhでした。

I s h o o t t h e s e c o n d

もう嫌だ、帰りたい

本当だったら今頃、藍越学園で高校生をやっていたはずなのに、何でこんな目に……

今は一限目のIS基礎理論授業が終わって休み時間

しかしながら、教室は異様なまでの緊張感に包まれ、変な雰囲気となっている

私以外は全員女子、教員に至るまでと聞いているが、一人、年配の

事務員さんが男性だと風の噂で聞いた

本当か判らないけど

何が言いたいかというと学園全体が女子ばかりなのだ

そして、困ったことに私は『世界で唯一ISを使う事のできる男』
として世界的ニュースとなって報道されており有名人となっている

なわけで、現在、廊下はそんな私を見ようとする上級生及び他クラスの同級生で大渋滞が発生している

しかし、IS学園は女子高、男子に免疫の無い方ばかりなので私をちらちらと見るだけで話しかけてはこない

いっその事話しかけてくれたほうがまだ気分が良いのだが

クラスには『あなた話しかけなさいよ』と言うのと『まさか抜け駆けするんじゃないでしょうね?』と言う相反する派閥が存在するみたいで誰も動こうとはしていない

ちらつと隣で私のことをガン見していた女子に視線を向けると慌てて逸らされた

それでいながら、『話しかけて!』と言うオーラを出しているのだからたちが悪いったらありやしない

しかも、全世界に私のプロフィールは公開されてしまっており、元日本代表で全女子憧れの的のお姉さまの実の弟だと言うのだからますますややこしい

本当に誰でも良いから助けて欲しい

ふと親友の一人、『五反田^{ごたんだ}』が羨ましいとぼやいていたのを思い出し、今からでも遅くないからすぐに変わってくれ!とSOSを心の中で発していると

「ちょっといいか？」

行き成り話しかけられた

「はい？」

もしかして、女同士の競り合いに勝ったのだろうか？

いや、どうもクラス全体に広がるざわめきと言つかどよめきからして一人だけ思い切った行動をとったようだ

容姿は黒髪のポニーテール、長さは肩下近くまである

身長は女子の平均くらいであると思うが、目つきが少し不機嫌そうに見え無駄に親近感が沸いた

最終的な評価としては美人、ただどこか抜き身の日本刀を思わせる鋭さを持っている

と言ったところ

ただ、気になった点は彼女の瞳には期待と恐怖が半々と言った感じだったことだろうか

「・・・・・・・・」

返事をしたのに何も言われず睨まれた

もしかして勝手に人物評価をしたのに気が付いて怒らせてしまったのだろうか？と、少し怖がりながら

「あの・・・・・・・・なにか御用でしょうか？」

と言葉を紡ぐ、うん、声には動揺は出ていないはず、大丈夫だ

「・・・・・・・・」

「……………」

「……………えっと、何か御用でしょうか？」

沈黙に耐え切れなくて同じ質問を繰り返す、うん、実は私の声が聞こえていなかったと言う可能性もあるわけだし

問題ない

問題ないとも

「……………話がある……………廊下で良いか？」

「わかりました」

そう言っただけで彼女の後に続いて教室を出ようとすると、廊下に集まっていた女の子達がザアアッと道を譲っていく

そして、廊下に出て向かい合う私達

ただ、私達を囲むように5メートルほどの距離を開けて女子が包囲網を形成している

しかも、聞き耳を立てているのが良くわかる

正直、教室を出た意味が無いと思う

「・・・・・・・・」

しかも、話しかけてきた本人は無言で睨みつけてくるだけ

どうすればいいんだろうか

廊下にまで歩かせておいて自分から話さないという随分な態度を取る日本刀みたいな少女

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

チラツと腕時計を見るともうすぐチャイムが鳴る、相手の女の子はコチラを睨むだけ、というか段々殺気さえ籠められた恐ろしい視線へとなっているんだが私はなにか悪いことをしただろうか？

した覚えが無い、というかする暇も無かった気がする

もうしょうがないので、コチラから話しかける

「あの、もうチャイムが鳴るんで用件を言っただけじゃないでしょうか？」

「なに？」

スウ　と細まる眼

なにか、私は不味いことをいったらどうか？　今までの言動を振り返っても、最初の観察以外心当たりが無い

なので黙っている

「覚えていないのか？」

「何をでしようか……」

「……」

パン！と言いつ心地よい音と共に頬に熱を感じる

「……」

意味がわからない、いや、頬を叩かれたと言う事はわかるんだが何故叩かれたか皆目見当もつかない

そして、叩いた本人の彼女は私に視線も向けずそのまま教室に入っていく

後に残されたのは頬を押さえてわけが分からないという表情の私と、固まっている女子で

とりあえずもう一回、呟いた

「は?」

そして、チャイムが響く

自然と周りを取り囲むようにいた女の子達も教室に入っていく

しかし、未だに私は何故叩かれたのかわからず、もう一回呟いた

「は？」

「なにをやってるお前は、席に着け」

「……………は？」

「……………」

バシーン！という音と共に出席簿が私の頭に直撃した。

「
であるからして、ISの基本的運営は現時点で国家の
認証が必要でして、枠内を逸脱したIS運用をした場合は刑法によ
って罰せられており」

痛む頬と頭を気にしつつ山田先生がすらすらと読み上げていく教科
書の内容と予習してきた内容との違いについてノートを取っていく、
まず間違いなく予習していなかったら授業について行けなかった

うん、面倒がらずに読んでよかった参考書

電話帳と同じくらい分厚い上に文字のオンパレードで目に優しくな
かったけど

というか、なんで私は叩かれたんだろう

さつきからノートを取りつつ考えているんだが未だにわからない、
しかもあの子は覚えていないのか？と言ってきた、つまり過去に会
ったことがある？

いや、会っていたら覚えているはずだ、美人だし、まず忘れない

もしかして、主人公君、私が憑依してしまった一夏が過去に会っていたのかもしれない
一時とはいえアルバムとか見て必死こいて織斑一夏になろうとしたが途中で姉さんにぼこぼこにされて以来、過去を振り返ると言ったことはしていない

これは、姉さんに後で聞いたほうが良いだろうと、考えていると

山田先生が私に話しかけてきた

「織斑君、大丈夫ですか？分からないことがあったら言ってくださいね？なんて言ったって私、先生ですから」

えっへん、といわんばかりに胸を張る山田先生

姉さんがやたら優しい声を出す理由がわかった気がした、なので自然と優しい声が出る

「ありがとうございます、今のところは大丈夫ですよ山田先生」

「はうっ！え、笑顔が……ああ、そんな笑顔を浮かべながら……撫でられたら……私……」

はて？笑顔とな？笑顔になっていたのだろうか？

「……何をやっている織斑」

「いえ、笑顔を浮かべていたのか確認を……」

そう言ってペタペタと自分の顔を触っていた手を止める

「……授業に集中しろ、あと山田君いい加減に戻ってこい」

「ふえ？」

一瞬だが姉さんの頬が緩みかけた気がする、と考えたところで

バシン！

と言っ音と共に脳天に一撃

恥ずかしかつたんですね？わかります、でも照れ隠しにやっ
ていい威力じゃないと思うんですが

あと人の頭の中を覗かないでください、エスパーですか？エスパー
ちふゆんですか？

そこで、可愛らしい服を着た姉さんが頬を赤らめ、狼のように鋭い
目を明後日のほづに向けモジモジしながら

え！えすぱーちふゆん！ここに参上！

とかつて言っていたら爆笑だなと考えたところで

ズガン！と良いのをもう一発貰った

「んん！ISはその機動性、攻撃力、制圧力と従来の銃火器を大きく逸脱した兵器となっている、そう言った兵器を深く知らずに扱うと必ず事故が起こる、それらが起きないようにするための基礎知識と訓練だ、理解が出来なくても覚える、そして守れ、規則とはそういうものだ」

ああ、全く持って正論だ

しかし、私は基礎を疎かにするつもりは無いものの早く実践的なことを学びたかった

此処、IS学園で私が学びたいことはISについて、と言うよりも『現存する生きた最強兵器』となるための方法である
簡単に言えば姉と同じ世界最強になりたいと言うこと

最初は日本政府保護の下、世界初の男性IS操縦者と言う肩書きになる予定だったが

姉さんのおかげで三年間の猶予と、自分の意思を貫くことが出来る可能性を貰うことが出来た

私の人生はISによって狂わされたと言っても過言ではない

いや、その前に神様に狂わされていたか

話を戻そう、私の人生はISによって狂わされた、そしてISによって進む道を決めることの出来る可能性を貰った

そう、簡単な話なのだ

強くなればいい

ただ強く、何者にも頭を垂れる必要の無い、かつて姉がいた頂点

世界最強に

それだけで良い、

簡単だ、まあ、言うのは簡単だが実際にはかなり厳しいだろう

諦めるつもりなんて毛頭無いが

今、世界では私を旗印として男性の地位向上を唱えようとしている輩がいるそうだ

その中には私の細胞を使いクローンを生み出し、それらを解剖、研究をすることによって全世界の人間がISを使えるようにする等とほざく奴だっている

というか居た、実際に

それらの言いなりになりたくなかった私は姉さんから言われた

「この書類にサインをすれば三年間は身柄の自由は保障してやれる」

との言葉に飛びつきサインをした

そして、私がサインをすると同時に姉さんは私に頭を下げながらこう言ったのだ

「許してくれ、私にはお前をたかだか三年しか守ってやれない」

と、そのとき思ったのだ、いい加減この人を守る人が居なければこ

の人が報われないと

だから、強くなる、世界最強という肩書きがあれば現世界最強の姉を泣かせずにすむのではないか？

姉が作ってくれた『ただか三年』がどれほど有難く私にとって大切だったか

それを世界に証明する、そして姉にわからせる

貴方のおかげだと

我ながら青いなーと思うが、それらが私が此処、IS学園で帰りたいとぼやきつつも頑張っている一番の理由だ

だってねえ？家族は守ってあげたいじゃん

と言うことで、頑張ってノートを取りますか、まあ、もう暫くは頭

部の痛みで動ける気がしないけど。

I shoot the second (後書き)

こんにちは、Northです。オリジナルそっちのけでこっちを書
いてしまう……

えすばーちふゆん……書きたいなあ、番外編でもいいから

「暴力で何でも解決！悩みも問題も出席簿で一刀両断！」

みたいな？

54

てか、個人的に大人組みが魅力的過ぎてしょうがないんですが
書けてるか？

文才無いけど書けてますか？

書けていたら幸いです、

ISは本当に魅力的なキャラクターばかりで楽しいです、シャル
ロットさんも早く出したいな！

まあ、次は篝さんの心情ですかねえ
その後にセシリアさん

今のところヒロインとか考えてないんですよえ

終わり方と主人公の構成だけ決めて書き始めちゃったんで、俺が魔王？も同じパターンですのでごい不安になりますか……

まあ、ゆっくりでも書いていきます、ではまたいずれ……

S h e s h o o t s t h e f e a s t

篠ノ之しのおの箒はらは怒っていた、

それは久しぶりに会った幼馴染は自分のことを覚えているだろうか
？ とか

念入りに、そう念入りに身嗜みを整え、声だつて変に裏返ったりし
ないよう、鏡に向かって朝早くから

「い、い、一夏！久しぶりだな！」

とかつて練習していたのが無駄になったとか

ずっと見つめていたのに一度も視線を向けてくれなくて寂しかったとか

いつまで待っても話しかけてきてくれなくて、我慢しきれず話しかけたのに丁寧語で、他人扱いされて思わず泣きそうになって、でも涙をこぼしたくなかったから我慢しようとしたら睨み付けるようになってしまつて又、泣きそうになったり、とか

もう分けわからなくなつちやつて、頭の中ぐちゃぐちゃになって、好きなのに気が付いたら叩いてたとか

もう、六年も会っていないのだから幼馴染と言えど覚えて無くても可笑しくないのに何やつてるんだ私……とか

だいたい、なんで大事な幼馴染に気が付かないんだ！とか

もう色々な事をひっくるめて、篠ノ之 箒は怒っていた

もちろん、一夏に対しても怒ってはいたが、どちらかと言うと落胆のほづが大きく

一番許せなかったのは大好きな彼を叩いてしまった自分だった

そりゃ、乙女心としては納得のいかない部分もいっぱいあるが、少し時間が経って頭が冷えてきた状態になると自分の行動は少し、急過ぎたなと思えるようになった

それに授業中、ノートにペンを走らせながら偶に、頭と頬を労わるように擦る思い人の姿が目に入ると言い知れない罪悪感に苛まれるのだから、彼に対する怒りはどんどん下火になっていった

かわりに、自分に対する怒りがどんどん強くなっていく

謝ろっ……

まず、謝って、それから自分の名前を言えばいい

そうすれば彼も思い出してくれるはずだ

そして、前に見せてくれた笑顔を浮かべながらお互い謝りあって、
これから此処、IS学園で二人の時間を築いていけばいい

幸いなことに時間はある、なにより、もう二度と会えないと思って
いた彼にもう一度会えたのだから

だから

「……謝ろう……」

今度は想いが言葉となって溢れ出てしまい、思わず担任の千冬さん
に叩かれるのでは！と警戒したが

自分ではなく、想い人が担任の先生たる千冬さんに叩かれていて、
それに思わずクスツと笑い声が漏れてしまう程度には落ち着けていた

「（次の休み時間に、もう一度話しかけて謝ろう）」

その今度は言葉には出さず心に誓って……

She shoots the feast (後書き)

と、言うことでタイトル道理、彼女の初めての射撃

もとい、お話

篤さん、個人的には好きなんですけどね・・・ストーリーの都合上、どうしても不憫な事になりそうなんですよね

さてさて、ガンガン書けちゃうISの二次小説、なんで？
ああ、原作が最高だからか

次はいよいよセシリア・オルコットさんの登場です

更新、何時になるかな・・・
案外早いかも

以上、Northでした。

I s h o o t t h e t h i r d

「ちょっとよろしくて?」

「はい?」

二時間目の昼休み、今度はホイホイとついでに行かず
一人寂しく音楽を聴きながら飴をなめて時間をつぶそうと思っ
たのだが

「まあ!なんですよ、そのお返事は?」

そんな一言と共に面倒ごとがやってきたことを理解した
話しかけてきた相手は、綺麗な金髪に白人種に良く見られるスカイ
ブルーの瞳がとても魅力的な女性だった、まあ、その綺麗な眼は釣
りあがった状態となっているが・・・

そして、困ったことにこの女性は世界の女性の多くに見られる

『いかにも』な雰囲気を出していた

正直な話をすると、こう言った人は苦手だ、というよりも嫌いである
とさえいえる

記憶がどうもちぐはぐで、あやふやな私だが『俺』だったころの人格が今の私と言う性格を形成するに当たって多大なる影響を与えており……まあ、何が言いたいかというと過去の記憶の中では、男女差別反対と声高に世界各地で言われており、このような男尊女卑ならぬ女尊男卑は納得がいかないのだ

「……聞いてますの？お返事は？」

と、どうやら考えに没頭するあまり彼女のことを忘れていたようだ

「何か御用ですか？」

前の休み時間中に言ったのと全く同じ台詞だが、今回はこの台詞の中に隠しきれない嫌悪感が出ていたと思う

とりあえず、口の中にある飴を転がす

うん、飴はやっぱりノンジュガのミントに限ると思う
おいしいし、匂いも良いしノンシュガーだから虫歯の心配や太る心
配も無し！

うん、サイコーだ

人と言う生き物は何か物を口に含むと安心できるそうだが、赤ちゃん
を泣き止ませるのにおしゃぶりを使ったりするのと同じような感じ

まあ、この年でおしゃぶりは無理だから、と言うよりも嫌だし、プ
ライドの問題でごめんなので私はよく飴をなめている

「随分な態度ですわね、このわたくしに話しかけられるだけでも光
栄なことだと言いますのに」

「そうですか」

「大体わたくしは誇りあるイギリスの代表候補生にして入試主席な
のですわよ？」

「そうですか」

「だいたい、わたくしのようなエリートと同じクラスだというだけで幸運なのよ？そのところを理解していますの？」

「そうですねか」

「ふん、まあ、わたくしは優しいですからESについて分からないことがあれば……まあ、泣いてお願いしてくれば教えて差し上げてよくなってよ？」

「そうですねか」

「なんて言っただってわたくしは、入試でただ一人だけ試験管を倒したエリートなのですから！」

「そうですねか……では、言わせて貰いますが……」

そう言って席から立ち、相手の目をまっすぐ見るようにしながら喋る

「代表候補生『し』ごとき』に何を教われと？」

もうやめだ、やってられん

がんばって我慢してきたが、もう無理だ

この女子ばかりの空間で生きていく以上は周りにそこそこ合わせようと思っ
て行動をしてきたが、それも止めだ

だいたい、私は此処に強くなる方法を求めて入学したのだ

それが ま

なんだ？

ハニートラップとかにも散々注意してきたのにちつと話しかけてきてくれただけの女の子に簡単について行ってビンタ食らう？

馬鹿だろ

間抜けすぎる

もしあれが私のDNAを狙って引っかけかのような攻撃だったらどうする？

此処が法律上どこの企業も、世界も介入することの出来ないISIS学園だからと言って気を抜き過ぎだ

だいたい、年頃の女の子と仲良くしようなんて、私には無理だろ

友人達にも言われていただろうが、丁寧な口調のわりに目つきが鋭いから話しかけにくいと

女の子達と仲良くする、そう言うのは原作主人公君の仕事だ

まあ、二、三人は仲のいい女友達が私にも居るが……

あれだって、本当に色々な要素が絡み合った結果として仲良く慣れたのだから

普通に過ごしていたら友人が出来ることなどまずありえ無いただろう

なので、もう止めだ

仲良くしましょうね？のお時間は終了しました

「なあ？！あ、あなた！今何と言いましたの！」

「だから、代表候補生』ごとき』に泣いてお願いして教わるようなことなどありませんと言っているんです」

ついでに言うならば優しさも売り切れました

「つつ！ESが使える程度で男』ごとき』が随分と調子に乗っているようですわね？」

「私の姉はブリュンヒルデです、なので貴方ごときに教えを請うようなことはありません」

「ぐ、それは……」

「あと唯一試験官を倒したと仰られましたが私も倒したんですよ、貴方の言う男』ごとき』の私が」

ピキッ っと嫌な音がした気がする

その直後、セシリア・オルコットさんが吼えるかのようにコチラに噛み付いてきた

「なあ！うそおっしやい！わたくしだけと聴きましたわ！」

「恐らく女子ではと付くのでしょうかね」

「ふざけないでくださいまし！そんなことありえせんわ！」

「あいにくと事実です、納得がいかないようでしたら教師の方に聞いてらどうですか？」

とそこでチャイムが鳴った、周りでコチラの様子を伺うようにして

いた女子もコチラに不安げな視線を浮かべながら各々の席に着いていく

目の前の女性はコチラになにか言いたげな表情を浮かべながら、

最後にフンツ！と言って、誰がどう見ても私不機嫌ですと言うオーラを出しながら席へと帰っていく

それを視界に納めつつ、自分も席に着きやたら分厚い教科書を開く

姉さんが山田先生を連れて入ってきた、そこで小さくなったものの未だに口の中に残っているミント味のキャンディを舌で転がすと普段よりもやたら苦い味に感じた。

「それでは、この時間は私が実践で使用する各種装備について説明する」

一限目とは違い山田先生ではなく姉さんが教壇に立っている、壁際には山田先生がノートを片手に立っていることからこの時間は大事

な授業になるようだ

「ああ、その前に来週に行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を
決めておかないとな」

ふと思い出したかのように言う姉さん

それ、結構大事なことじゃないんですか？もしかしてど忘れして
ましたか？

バシン！

「うぐ！・・・いたいです、先生」

「痛くしているからな」

「と言うよりも何故叩かれたのでしょうか？」

「私はど忘れ等していない、こう言えばわかるか？」

「……………ごめんなさい」

いよいよ、えすぱーちふゆんの可能性が高まってきた

「はあ……………クラス代表とはそのままの意味で、まあ、クラスのまとめ役だと思えばいい」

又、クラス代表は生徒会の会議や委員会などに出席しなければなら
ないが、クラス対抗戦に出られるようになる

このクラス対抗戦は現時点ではたいした差は無いが、クラスごとの
実力を把握するために行われる、その為、優先的にアリーナの使用
許可がその生徒には降りるようになる

簡単に言うところか……………で、自薦他薦は問わないから
誰か居ないか？」

まあ、アリーナの優先的使用許可は魅力的だが正直これはパスした
い、生徒会やら何やらで時間を取られそうだし
それに多分だけあの金髪の代表候補生がなるだろう

代表候補生ごとき、と先程は馬鹿にしたがそれは姉と比べたからだと比べたら彼女のほうが何万倍も努力をしてきたのだろう、私なんかはISの飲み込まれた際の脳に直接情報を流し込むような感覚が不快で、全力で脱出したくらいなのだから

試験だってぶつちやけるとかなりせこい勝ち方をしている

正直な話、代表候補生という彼女の性格がもう少し普通だったらイギリスに貸しを作るとしてもIS操縦について教えて欲しかった

教えて欲しかった……

もう無理だけど、あと今後の学園生活が最悪になることも確定してしまっただけ

「はい！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思いますーす」

「嘘お！？」

馬鹿な！何故此処で私の名前が出てくる、はっ！まさかクラス代表にして他のクラスと結託して私を公開処刑するつもりか？

野郎が生意気な事、言ってんじゃねーよ！……的なの？

「煩いぞ織斑、他に居ないか？居なければ織斑で決定だな」

「待つて！待つてください！」

「待たん、他薦の場合はその者からの期待を受けているとして棄権は認めん」

「流石に本人の意思を一切無視するのはひどいと思います！それに」

「待つてください！納得がいきませんわ！」

突如として甲高い声が私の抗議の声を遮った、まあ、先程も聞いた声だから誰が言ったかは分かるが

バン！と机を叩いて立ち上がったのはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんだ

「そのような選出は認められません！だいたい男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

ふむ、まあ選出の仕方については同意できるな

「実力から行けばわたくしがクラス代表に相応しいのは確実。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこの様な島国までIS技術の修練の為に来ているのであつて、サーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

たしかに、物珍しさで選ばれたならごめんだが、猿とは随分な言い様だ、まあ、外国の方からしたら皆、同じ顔に見えるそうだけど

「いいですか？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

興奮冷めやらぬ、と言うよりエンジンが暖まってきたこれからが本調子だと言わないばかりのセシリアさんが凄腕剣幕で怒声を上げる

「ふん！だいたい、この様な男が、このISS学園に居ること自体間違いなのです」

がり……

そんな音が教室に響いたと思ったときには、自分の口から言葉が出ていた

「うるせえな……」

「……今、貴方が言いましたの？」

噛み砕き、細かくなった飴の残骸を更に噛み砕きながら言う

「うるせえって言ったのが聞こえなかったか？」

「あ！あなた！なんですの！？その言葉遣いは！」

「それを言う前にテメーの発言を振り返れ、つかイギリスだって島国だろっつが、その上食事は微妙だし」

「なっ！わたくしの祖国を馬鹿にしますの！？」

「先に侮辱したのは貴様だろうが」

「それにその野蛮な言葉遣いといい、騙しましたわね！」

「あっちが素だ、本気で嫌いな相手には攻撃的な口調になるがな」

「っ！決闘ですわ！」

「わかりやすく良いね」

「言うておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い・
．．．いえ、奴隷にしますわよ」

「悪いな、私にはそういう趣味はないから、他所で男漁りでもして
いてくれ」

「……何処までわたくしを侮辱しますの……」

「素直な感想を言っているだけだが」

「いいですわ、わたくしが全力で貴方を倒します」

「やれるもんならやってみな」

そう言うってお互いに向き合いながら浮かべるのは笑み
すると、パンパン！と言う拍手の音と共に姉さんがその場を納める
ように言葉をつむぐ

「ふむ、ではクラス代表をかけての勝負は一週間後の月曜日。放課
後、第三アリーナにて行う。織斑、オルコットの二名は用意をする
ように、では授業を始める」

最後にオルコットさんがフン！と鼻を鳴らし、私がそんなオルコッ
トさんを一睨みしてから二人とも席に着く

一週間の間に遣れること凡てを遣って、試合に勝つ

負けたりしたら、世界最強なんて絵空事でしかない狂言になってしまおう

まあ、今は授業を真面目に受けることにしよう。

I shoot the third (後書き)

やっと書けた・・・大学忙しいなあ(泣)

社会人になったらもっと忙しくなるんだろうな・・・憂鬱です。

皆さん、こんばんわ、こんにちわ、おはようございます、North
hです

オリジナルの方ほっぽってこっちはばかり更新・・・

何とかせにゃなあ・・・と思いつつ出来ない今日この頃

まあ、今回の話はNorth的に微妙です、書き直しするかも

セシリアさん好きだから、もっと良い人になって欲しい・・・

まあ、セシリアさんはこの作品の中ではライバル的ポジションの予定なので恋愛は無いはず！

まあ、楽しんでいただければ幸いです、以上、Northでした。

PS、感想欄に皆様からの質問がありましたので説明させていた

だきますと

この小説の一夏君にとって、恩もあるし大切な人でもある千冬さんが一夏君の為に頑張ってIS学園に入学させてくれたのを、全否定するようなことを言われたので、メリット、デメリット無視で戦うこととなった

と言う設定です、わかりにくかったようでスイマセンでした

I s h o o t t h e f o u r t h

『私は怖い

俺は恐い

僕は怖い

永遠と退屈と言うモノが

なぜなら、それらは容易く私たちを蝕むからだ』

- - * - - * - - * - - * - - * - - * - - * - -

「ふう……」

思わずため息が出てしまうが、しょうがないだろう

今は放課後、本来なら同じ中学校から進学した仲良し組みが話したり、新しく友人になった人と楽しくお喋りをして親睦会としてカラオケやボウリングなどに繰り出そうとお誘いの声があっても良いものだと思うが、そう言ったものは皆無だ

と言っか、全寮制である以上寄り道などは出来ないが

本当になんでIS学園なんだろう、藍越学園じゃなくて。

まあ、もう見慣れた光景と言っか何と言っか、見慣れてしまっても悲しいのだが放課後になっても他のクラスから人が押しかけキヤイキヤイと遠巻きにこちらを見てくる

私はパンダか？

もう本当にいい加減にして欲しい、遠巻きに眺めて小声でひそひそと話されるのは結構ストレスが貯まる

前にも入ったような気がするが話しかけてくるほうがまだマシだ

ごめん、訂正する、行き成りビンタかます子や、いかにも今時なお嬢様はごめんだ

もう、お腹一杯です、もたれかけてます

溜め息一つ吐いてから

イヤホンをミュージックプレイヤーに接続し耳に入れようとしたところで声をかけられた

「ああ、良かった、まだ教室に居たんですな織斑君」

「ええ、そろそろ帰ろうと思っていた所ですが、私に何か？」

相手は山田先生で、書類を片手に立っていた

「えつとですね、織斑君の生活する部屋が決まりました」

そう言つて、私に部屋の鍵と思われるカードキーと手書きの地図を渡す山田先生

此処、IS学園は全寮制である、理由としては強引な企業や国家の勧誘から生徒を守る為とのことだが

「あれ？私は異例というか特例のため、部屋の用意が出来ず、暫くの間は自宅から通うのではなかったですか？」

「そうだったんですけど、その……事情が事情なので何とかI

S 学園内から出ないようにしないといけないって事で政府のほうからも連絡があつたんですけどそこらへんの事は聞いてませんか？」

ふっと近づいて、背伸びするように私の耳元に口を持ってきてコンコンと話す山田先生

ちょっとくすぐつたいです

「なるほど、ご迷惑をお掛けしてすいません」

とりあえず、お礼を言いながら頭を下げると、山田先生は面白いぐらいに慌てだした

「い、いえ！全然！迷惑なんてかかってないですよ？それに私は先生ですからじゃんじゃん先生に頼ってくださいね？・・・あ！でも強引なのはだめですよ？そ、そのう先生強引なのは弱いです

から……でもでも！織斑君と付き合ったら織斑先生がお姉さんになって……いいかも」

うん、慌てたと言うよりも、暴走もっそうを開始した

せんせ　　そういうのは、言わないほうがいいと思います、仮に思ったとしても口に出しちゃいけないと思います

いきなり、耳元に顔を近づけた後に顔を赤くしてトンデモナイ事を言っのける先生

ああ、ほら教室に残っていた人たちが聞き耳を立ててるし、この感じはまた変な誤解が生まれそうで嫌だな

とりあえず、一歩下がってから話しかける

「山田先生、とりあえず荷物が無いので今日は一旦家のほうに帰っても大丈夫でしょうか？」

「ふゆえ？」

若干、頬を赤らめながら首を少し傾けこちらを見る山田先生……
え？何この可愛い子

夕日の所為で頬が赤くなっているのだと思いたい、決して妄想が半端無いくらい暴走したからじゃないと思いたい

だってそうじゃなきゃ、この可愛さを素直に認められなくなるから

なんだ、子供がどうのこつのか、ハネムーンは何処とか

とりあえず、もう一回言おう

「しばらく自宅から通うと思っていたので手元に荷物が無いんです、だから一時帰宅の許可を頂けませんか？必要な書類とかも書きますので」

「あ！荷物なら……」

「私を手配しておいた」

そういつて現れたのは我らが姉さん……なのだが

「ありがとうございます？」

「何故疑問系なんだ？」

「いや、だって……ね？」

そう、困ったことに姉さんの手にあっただのはひとつのポストンバッグ

どー考えても、生活必要最低限のものしか入っていない気がする
本当に必要最低限の……

「お前は携帯の充電器に音楽プレイヤーの充電器と服さえあれば問題ないだろう？」

「いや、まあ、否定できませんが……」

実際、それだけあれば文句は無い

ただ……友人達にも言われたのだが、普通はもつと荷物が必要らしい

日々の潤いとか潤いとか……五弾田ごだんだが目を血ばらせながら熱く語っていたし、樹きも同じようなことを言っていたし

「じゃあ、時間をみて部屋に行ってくださいね？先生たちはこれから職員会議がありますから。ああ、食事は6時から7時の間に一年生の食堂で取って下さいね？ちなみに、各部屋にシャワーがありますけど、大浴場もあります、ただ、織斑君は今のところ使えませ
ん」

「えっと、銭湯近くにありましたよね？」

「あつても行かせる訳が無いだろうが馬鹿者、何のためにお前を此処から出さないようにしていると思つ」

「ですよー、ま、暫くシャワーで我慢しますよ」

そう言つて姉さんからポストンバックを受け取つて、二人に声をかける

「じゃ、お仕事がんばつて下さい、私は部屋のほつに行きます、今日は色々あつて疲れましたから」

「はい、あー道草食つちゃだめですよ？ちゃんと真つ直ぐ寮に戻る

んですよ?」

「はは、了解です」

「ふん……またな、織斑」

「また、明日ですよ、織斑君!」

そう言っつて二人は去って行った、この時

本当は薄々とは言え気が付いていた、ただ、認めたくなくてその現実から目を背けていたのかも知れない

いや、よそつ、素直に言おうじゃないか、まさか、いきなりレベル

1の状態でラスボスに挑みかかるような事になるとは思っていないか
つたのだ

少なくとも、こんな装備では勝てない

頭：なし

目：睨むとすれ違うチンピラっぽい人に小声で「すみません……」
と言われる、呪いの装備

耳：イヤホン

首：なし

胴：IS学園特注男子学生服上（音楽プレイヤー内蔵）

脚部：IS学園特注男子学生服下及びIS学園特注男子学生用靴

手：ポストンバック

最低でも大きなゴミ袋10個とゴム手袋に汚れてもいい服装が欲しい

まあ、無いもの強請りをしてもしようがない諦めも肝心だと今日で
学んだ、学びたくは無かったけど

い出せるといところでお腹に軽い衝撃

「えーい！」

ぼす……と言っ音と共に彼女……もう電気ネズミでいいか？
が私の腹部に飛びついて来た

「ね〜ね〜おりむ〜、おりむ〜の部屋ど〜？」

とりあえず、名前を思い出したので呼びかけながら離れてもらおう
と声をかける

「えっと、のほとけ布仏 ほんね本音さん、離れてくれますか？てかおりむー？」

「・・・」

なんだこの子、ひどく驚いた顔してこちらの顔をまじまじと見て私の顔になんか付いているのだろうか？
いや、その前に平気な顔で私に話しかけてる子の子が凄いと思う、私なんか自分の顔を見て悲鳴あげたくらいだぞ？特に寝起き

「はじめて、なまえよばれた」

「え？」

なんだと？この子もしかして苛められているのか？

名前呼ばれたこと無いとか、あれですか？フルシカトでお前の名前なんか呼びたくないぜー見たいな感じですか？

いやいやいや、この子すげー癒されるよ？なんかよくわからんが
少なくとも私は警戒心抱かなかったもん

なのに、苛められているんですか？不憫すぎる……

「みんな、わたしのことのほんさんって呼ぶから〜」

それで納得、良かった苛めとかじゃないんですね？
少しほっとして体の力が抜ける、

「えっとね？おりむ〜はあだ名だよ？いやだった？」

「あーいえ、別にいやではないですよ？、ただ初めてだったんで少
し戸惑いました」

ええ、何を隠そうあだ名なんぞ初めてです、まず友人自体とてもとても少ないですし、勘違いしないでくださいね？居ないんじゃないんです少ないんです、これとても重要ですから

「そなの？じゃあー私がおりむくのはじめてだね」

「そうなりますねー」

彼女の声に釣られてこちらも間延びした話し方になってしまつが不思議と悪い気はしなかった

「おりむ〜あだ名は仲のいい人同士で使うんだよ？だからおりむ〜も私のことあだ名で呼んで？そうすれば、ほら仲良しだもん」

そう言ってふにゃんとほほ笑む彼女、今更ながら彼女を腰に装備しているような状態で会話をしていたことに気が付き若干顔が赤くなる

「えっと、本音ちゃん？」

「うっ？」

すーっつと顔が赤くなる電気ネズミ、あだ名と言われても思いつかなかつたので率直にちゃんづけにしてみたのだが不味かつただろっか？

「うっ・・・うっうっうっうっ」

そのまま、唸るとパッと私から離れ

「まーまた、明日ね、おりむ〜」

そういつてパタパタと駆け出した……あ、こけた

とりあえず、周りに私と本音ちゃんの会話を聞きつけて集まっていた人から逃げるようにカードキーを差し込む

なぜ？

電気ネズミみたいな本音ちゃんだけなら問題は無かったのだが、まー少々過激な服装の方々が大量にいるからである
例としては胸元をかなり開けているパジャマの子やパーカーに下は下着のみとか、まあ際どい格好の子が大量にいたためそうそうに逃げたかったのだ

「んー？」

「織斑君の部屋ってあそこなんだ？」

「あれ？でもあそこってさー」

そして、そのままドアを開けてから限りなく狭い隙間のみを開けて

ながら部屋に侵入

そして、私は腐海へ迷い込んでしまったようだ

「……さすがに、これはない」

そう、私に振り当てられたのは寮長室、別名 織斑 千冬の部屋

何と無くではあるが予想できた、しかし認めたくなかったというのが本当の処だろうか？

ベッドがあつたであろう場所には雑誌や空の缶ビールが放り投げられ、洗濯ものだろう下着があちらこちらに散乱している

おそらく、最近はずスペースがなくなったせいでソファで寝泊まりしていたのだろう、ソファにはタオルケットが一枚置いてあり、その前にあるテーブルには書類と思われる紙媒体とパソコンが鎮座しており、その間を縫うかの如く缶ビールの空と、つまみの空き袋が置いてある

ふと台所に目を向ければ流しの処にどれほど時間がたったか分からないお皿が5、6個にもう見慣れてしまった空き缶が大量に

ゴミ箱らしきものは部屋の角でゴミ山になっている

溜め息を吐きながら姉さんの下着とか踏みながら冷蔵庫に向かう

開けてみれば中に入っているのはつまみと缶ビールのみ

とりあえず、比較的無事なソファの上に自分のバッグを投げてから袖をまくる

「さーって、魔王退治と行きますか……」

すっかり、癖のようになってしまった溜め息を吐きながら私は部屋のかたづけに挑むのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3215t/>

IS The plunderer has a dream

2011年11月13日14時52分発行